An Elderly Wanderer, 我が足跡を振り返って…未来に翔る KG 若人に贈る

ワンダーフォーゲル部　南井克之（昭和 38 年卒業）

It’s now or never ！

ワンゲル OB です。卒業後はアメリカを主とし、英語を使った海外勤務が 17 年間と長かった人生でした。本日は、我が足跡を振り返り、学生生活はその後の人生にとって掛替えの無い期間、自分を鍛える、磨く、作るには、大学の 4 年間の “ 今 ” しかないというメッセージを届けたいのです。その流行語大賞になった「今でしょ」をズバリ表す英語表現は、歌手プレスリーの曲 “It’s now or never ！ ” がピッタリと思っています。皆さんの “ 今 ” は、2 度とやり直しのきかない実に大切な 4 年間です。

（写真提供：執筆者）

1. ワンダーフォーゲルの由来と KG ワンゲル部の歴史

ワンダーフォーゲルとは、ドイツ語で「渡り鳥」。19 世紀末、ドイツで行われた野外活動が、第一次世界大戦敗戦後、人間の心を取り戻すため自然遍歴の旅をしようと徒歩旅行団体を結集し、名づけられた運動で、山野を巡り歩いて、心身を鍛えることを目指すスポーツです。

我がワンゲル部は、試合、記録、競争が無いため、「スポーツワンデリズム」という活動の理念を打ち立てて、昭和 30 年に創設されました。アルピニストの登山が、部外者の助けを得ても、高い山の登頂制覇を目指すのに対し、ワンゲル部は、団体規律の下、トレーニング・訓練合宿を行い、夏山・冬山のみならず、沢登りや藪漕ぎも含めた、幅広い地域での、美しくも厳しい自然を踏破する学生活動を目指したのです。

（写真提供：執筆者）

写真は、長野県の戸隠高原にある、関西学院大学戸隠山小舎ですが、学院からの援助金、ワンゲル部の OB・OG、現役父兄からの寄附、イベント収益、現役アルバイト料などからの資金

を得て、建てられました。ワンゲル部員の心の故郷とも言うべき存在で、今もワンゲル活動と切っても切り離せない関係にあります。夏の慰霊祭、冬のスキー合宿、その合間を縫って戸隠の人々やOB･OGとの交流などに使用されています。体育会への加入は昭和33年、部への昇格は昭和36年、私が3年部員の時でした。

2. 大学ワンゲル部での厳しい活動から得たもの

大学では勉学だけではなく、心身を鍛錬したい、それも厳しい団体生活で、自然の良さ、怖さを知ることが出来る部活動をしたいと考え、ワンゲルに入部。坂道の多い学院周りの長距離ランニング、人を肩車で甲山を登るとか、砂袋を積んだ重い荷物を担ぐとか、厳しい訓練を行った後に初めて、自然を歩く合宿に入るという部活動でした。私は1、2年部員の間は、走っても、歩いても、遅れを取るバテ気味の部員生活の日々を過ごしましたが、それでも入部当初の気持ちを忘れず、自己鍛練することが大事と思って、4年間頑張り通しました。厳しい中で初めて見出す楽しさ、美しくも怖い自然と向き合う緊張感、確かに張り詰めた部活動でしたが、その分、同期とは勿論のこと、年月が過ぎても、世代を超えてのワンゲル先輩・後輩間の生涯の絆が強く育ったのだと思います。

山での事故の話ですが、1年部員の秋合宿、日本アルプスで、岩がごろごろと多い、凍った斜面を滑落しました。その距離1km、高低差300mでしたが、まさに九死に一生を得た滑落事故でした。その時、神さまが救って下さった、自分には何かやらねばならない使命がきっと与えられているのだ。ならば、ワンゲル活動の無い時には、しっかりと学生の本分は全うしようと、心に決めたことを覚えています。

ワンゲルで得た教訓の話ですが、2年部員の時、肉体的に厳しい練成合宿でのこと、「頑張っている1年部員の前で弱音を吐くとはケシカラン」と、上級生部員に殴打されたことがありました。キャプテン・副主将と私だけがいる八ヶ岳連峰の池の畔の岩陰でのことでしたが、瞬時に殴打の背景、つまり立場をわきまえない自分の言動を納得したことを覚えています。上下関係の中で自分がどのような立場にあるのか、そしてそれに相応しい言動が求められることを身を持って学びました。この経験から会社時代にも辛い思いをしながら頑張っている部下や若い人たちのいる前で、会社、事業、上司について、否定的なことは云わないように気を付け、心掛けていた自分を覚えています。

いざという時のOBの結束力のことですが、10年前マスコミにも報道された、雪の大長山での遭難事故。その際、事故の救助や後始末に多額の費用が掛かりましたが、当時302名のOB・OGから、予想を超える700万円近い義援金が、それも一挙に集まりました。それは自分たちの現役時の厳しくも楽しい活動を思い出し、何とかしなければと多くのOB・OGの心が動いたことの証です。なお、学院はじめ皆さんからの心のこもったご支援のお蔭で、全員無事に帰還できた事故でした。

3. 会社勤めと長い海外駐在経験で身に付いたもの

勤務した会社は合成繊維やフィルム・樹脂の製造業、私はその営業分野を担当。入社後の8年間は、大阪で国内の織物販売を担当、売れるモノづくりの一端や営業の基本を叩き込まれ、その後の仕事の出発点として学ぶところは大いに有りました。なかでも、取扱い

製品によって顧客から受ける対応の落差、理不尽な扱い、それらを若い時に経験したことが、その後の会社勤めでの営業の心構えのベースとなりました。

入社 9 年後、30 歳の時、アフリカはエチオピア政府との織物製造の合弁会社へ出向し、最貧国での 3 年間の駐在に始まり、その後の会社の新規事業や勤務の拠点となった東京からニューヨーク、そしてパリ、ロサンゼルス、シャーロット（米国ノースカロライナ州）へと、17 年間の海外駐在を経験しました。その中でも、苦労したのは、色々な新規事業分野での専門・技術用語のために必要な英語力でした。心掛けたことは、日本人、つまりアメリカでは外国人であることを旨く活用することでした。play the foreigner card と言いますが、「日本人がアメリカのそんな事まで知っている！」と驚かせて、心を掴み、惹きつけることで、難しい局面を切り抜けるやり方です。例をあげてみます。カリフォルニア州で、当時注目を浴びていた新進の会社との商談でした。東京からの出張者として現地ロサンゼルス事務所の担当者にアポ取りを頼んでいましたが、そのアポが取れないままに一ヶ月以上が経ち、訪問を予定していた前日となったので、私自身が東海岸から、直接、西海岸の会社に電話を入れました。すると、社長が電話口に出たので、“This is Kirk Minamii.” と名乗ったら、その社長が、“Why Kirk ？ ” と訊いてきました。予期せぬ質問でしたが、とっさに、“Because I like Kirk Douglas.” と答えると、その社長は、あっさりと、“OK ！ See you tomorrow at ten thirty.” と、即答でした。アメリカの往年の俳優の名前を自分の呼び名にしている日本人に心を開いたということなのでしょう。これが、play the foreigner card です。その初面談から、同社の製品を日本で販売し、将来は製造技術を導入するという実質的な契約合意が出来たのです。このような経緯で取り組んだ製品が今や産業用途に欠かせない脚光を浴びる商品になっています。

4. 駐在時代での KG 同窓生との出会い

56 歳からの 4 年間、エレクトロニクス事業の開拓のため、ノースカロライナ州のオフィスを拠点に、全米の活動をしましたが、この間、素晴らしい同窓生との出逢いがありました。商学部昭和 50 年卒の野上義生君は技術や市場の知識と英語力のセンスもある有能な後輩の存在でした。私が先輩であるということもあり、野上君は日本での窓口として、私の仕事を大いに助けてくれました。同じ大学の先輩・後輩の絆が有って、楽しく順調に事業展開が出来ました。同じ学校で学んだことが誇りと思えるように、皆さんには良い学生生活を送って欲しい。そのことこそが、社会人としてのしっかりとした基盤になることを覚えておいて欲しいのです。

5. 現在、心掛けていること：運動と英語学習

週 1 回の水泳ですが、長年、最もストイックに守っている運動です。年間の水泳距離が 150km を越えたため、プールマイスターなる称号を東京都練馬区から授与されました。その他に、健康維持のために、ゴルフと山歩き。次頁の写真は、この 2 ～ 3 年の間に登った夏山で撮ったものです。3 年前は五竜岳、昨年は白山、今年の夏は鳥海山など、2,300 ～ 2,800m 級の高山に登った時の景観です。日本一高い山、富士山には御殿場からの最長

コースで、48 歳の時に登りましたが、昨年の秋には東京都で一番高い山、雲取山 2,017m に、ワンゲル後輩数人と登りました。歳を取った今も、山に登ると、いつまでもワンダラーであるのか、心地よい達成感があります。

（写真提供：執筆者）

今も続けている英語の学習のことですが、ネイティブ指導の下でこの 3 年間は、「書く英語」の学習に力を入れました。自分でテーマを決め、長年、海外生活を経験した視点からの問題意識、自分の主張や日頃の想いを小論文形式にまとめるのです。話す英語も英作文も、自分が持っている人としての中身、つまり主張、知識、ひいては人柄が表れるものだと痛感していたので、ネイティブ指導者の手前もあり、頑張りました。その小論文をまとめて、一冊の英文エッセー集にもしました。さらに、東京駅近くにある関学オフィスで、月一回 OB･OG 同志との英語サークルに参加、英語で時事問題を音読、論議する時間を持っています。日本語での記事だけでは読み流してしまうことも、英文解釈を含め参加者との論議のための準備により、中身や内容の深みを学ぶことも多いので充実した相互研鑽の機会になっています。

6. 日本語文化の理解

日本人として、グローバル社会に対応する真の人材になるために先ず認識しておく必要があるものは何か。それは、日本人の発言や交渉下手の背景、様々なことに関わる日本語の曖昧さのこと、それに由来する日本人特有の思考パターン、曖昧な表現です。何より、そのことの認識欠如です。独特な日本語表現のあり様が根底となって、それが社会全体のあらゆる文化の側面、国内外の政治にも（正しく伝えるべき国際の場での通訳にも！）影響していると思われます。日本語の文章は、何より相手への尊敬の気持ちを表す言葉、自分を謙遜する表現、丁寧さを伝える言い回し等々から成り立っています。また、驚くべきことに、日本語は話し言葉であれ、書き言葉であれ、話し手と聞き手の間の年齢差、社会的地位、そして二者が如何なる関係にあるのか、ということで言葉そのものの選択や表現の仕方が変わってきます。つまり、話す中身の論理よりは、むしろその言葉の選択や表現の仕方の方が大事になることが起こるということにもなります。若い皆さんには日本語・日本文化の特徴を踏まえながらも、先ずその特異性を認識すること、その上で地球人とし

て明確なメッセージを発信でき、堂々と渡り合える人材に成長することを強く願っています。

7. 最後に

充実した大学生活の 4 年間は、卒業後の活躍の基礎や支えとなるもので、何より共に勉学し、楽しくというより、むしろ厳しく共に心身鍛練した仲間との間にこそ生涯の絆を築いてくれるものだということ。私の場合は、ワンゲル部の部員生活での厳しい心身の鍛錬が、その後の社会生活の様々な場面で人生への自信をつくってくれたと考えます。また、17 年間の海外生活、海外営業活動の中、関西学院での英語教育の点でも、恵まれた環境の中で英語の基礎力を身に付けることが出来たこと。それが如何に大事であったかを再確認する昨今です。関西学院大学は、国から国際化に向けて重点支援されるという「スーパーグローバル大学」に選定され、素晴らしい教育環境に恵まれた学び舎です。自分を鍛え、卒業後は社会に役立つ、奉仕できる人物になれるよう、この恵まれた環境を意識し、生かすよう心掛けてください！

・自分が目指すことを定め、それに向かって挑戦、しっかりと文武両道の充実した学生生活を送って欲しい。

・グローバルな場で活躍できるよう、英語というコミュニケーションツールをしっかり身に付けて欲しい。

・学生時代の 4 年間の鍛錬は、その後の人生を支えてくれるものである。

学生時代の今、今しかない…将来を支えてくれる土台を創るのは、今です。卒業してからでは、遅すぎる。今でしょ！　Tomorrow will be too late ！　It’s now or never.

以上

（写真提供『関学スポーツ』）